

今年のノーベル平和賞に「核兵器禁止条約」採択に貢献した国際非政府組織(NGO)、核兵器廃絶国際キャンペーン「ICAN」(アイキャ)が選ばれた。

2007年にオーストラリアのメルボルンで発足。スイスのジュネーブに事務局を置き、101の国と地域のNGOや平和団体が連携し、核廃絶を目指してきた。賛同する団体は468団体(9月27日現在)。中心

メンバーは20〜30代の若者たちで、世界を動かす原動力となったのは広島・長崎の被爆者の存在だ。

核兵器禁止条約を求める世論を高めるために、インターネットやSNSを使ったキャンペーンを展開。広島での被爆体験の証言を続けるカナダ在住のサロー節子さん(85)や、長崎の被爆者で「日本原水爆被害者団体協議会」(日本被団協)の代表委員を務め、今年8月に亡くなった谷

岐路に立つ今こそ “被爆者”の 声を聞く

多くの政治家が「なぜ憲法を変えてはいけないのか」説得力のある答えが言えず、憲法改正のプレッシャーが日増しに高まるなか、戦争当事者である広島・長崎の“被爆者”の被爆体験を聞く動きが広がっている。岐路に立つ日本であらためて聞く命のメッセージ。

村田 くみ
ジャーナリスト



東京から来た修学旅行生たちに被爆体験を話す下平作江さん

口稜睡さん(享年88)ら、被爆者たちに寄り添い、被爆体験の証言を世界に伝えてきた。

今年7月に採択された核兵器禁止条約の交渉会議初日には、会議の前、アメリカなど20カ国あまりが不参加を宣言。緊迫した雰囲気なかで、サローさんの演説が始まった。〈私の脳裏に真つ先に浮かぶのは、まだ4歳だった甥の姿。誰かも分からないような、真つ黒で膨れあがった溶けた肉の塊と化し、死の間際まで消え入りそうな声で『水がほしい』と言いつけていました。私にはあの子の姿が、世界中の子どもたちの姿に重なるのです。私たち被爆者は信じています。この条約は世界を変えられると――〉

サローさんの力強い演説は、動画配信サイトにアップされ、瞬く間に世界中の人々に発信された。そして、条約の前文には「核兵器使用による被害者(ヒバクシャ)の受け入れ難い苦しみ(留意する)」という一文が付け加えられた。

多くの日本人は、広島と長崎に世界初、原子爆弾が投下されたことは、学校の授業で学んでいるが、(受け入れ難い苦しみ)がどれほどのものかは、あまり知られていない。

私を引き止めたのは妹でした(下平さん、以下同)

妹・遼子さんは外に出ようとする度、下平さんのおんぶひもを引っ張った。

それが生死の分かれ目だった。「11時2分。ピカッと光った以外、私は何も覚えていません。防空壕の中に吹き込んだ猛烈な爆風に飛ばされて岩に叩きつけられて気絶してしまっただけです。どのくらい時間が経ったかわかりませんが、誰かに頭を叩かれてようやく目がさめました」

目の前に広がったのは地獄絵のようだった。肉がちぎれて血まみれになっている人、眼球が飛び出ている人、火傷を負い、2倍3倍に皮膚が膨れ上がっている人――。誰もが口々に「水をください」と悲痛な声をあげていた。

気絶した遼子さんを見つけ、岩の隙間に挟まっていた甥を助け出し、壕の中で肩を寄せ合った。翌朝、父(叔父)が助けに来た。

負傷者や遺体であふれる壕を抜け出し、外に出ると一面焼け野原。爆心地から300メートルにあった自宅の周辺は廃墟と化し、我が家は崩れ落ち、焼け残ったコンクリートの門扉が転がっていた。がれきをかき

1万回以上の被爆体験講話で いのちの大切さを伝える

「若い人たちに、戦争はいけないと伝えることが、生き残った私の務めなのです」

そう語るのは、長崎の被爆者、下平作江さん(82)。

40歳頃から始めた被爆体験の講話は年間約2〜300回にも及び、延べ1万回を超えたという。原爆の後遺症で子宮、卵巣、胆のうを無くし、今は肝硬変を患い、白内障で両目の視力は低下。入退院を繰り返す。1日に10種類以上の薬を飲む。股関節には人工骨が入り、おぼつかない足取りだが、「元気なときはなるべく話したい」と、小柄な体で動き回る。筆者が訪ねた日も修学旅行生などを相手に3件もの講話が入り、スケジュール帳には予定がびっしり埋まっていた。

下平さんは中国・旧満州で生まれた。満州鉄道に勤務する父は殺され、母は他界、残された姉妹は伯母一家に引き取られて実子のように育てられた。

1945年8月9日、サイパン島から約8キロのテニアン島から飛行

わけると真つ黒な遺体が出てきた。22歳の姉(従姉妹)だった。両手で目と耳を押さえていたので顔はきれいだった。母は近所の家で見つかった。金歯でやつと本人だとわかるほど。涙も出ず、呆然とその場に立ち尽くした。

「医大生だった次兄は、爆心地から約800メートルの教室で被爆しましたが、柱の陰にいたため助かったそうです。『兄ちゃんよかったね』と、喜んだのも束の間。傷ひとつないのに歯茎から出血と下痢便、嘔吐を繰り返すようになったのです」

医師に診てもらおうと父が救護列車に乗せたが「傷がない」という理由で、列車から蹴り落とされたそうだ。友人たちに抱えられるようにして再び防空壕に戻り、入り口の近くに寝かされた。何度も嘔吐し、苦しんだ。そして4日後、「死にたくない、死にたくない」と叫びながら息を引き取った。

貧困、差別、病苦…… 戦後も続く被爆者の苦難

戦後、日本を占領したGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)は、原爆の惨禍を隠蔽しようと、45年9月

機「ボックスカー」が飛び立った。投下の第一目標だった、福岡県小倉市の上空は厚い雲に覆われていたため、第二目標の長崎市に変更した。飛行機は雲の隙間から「ファットマン」を投下。広島に続き2発目の原子爆弾は、谷地となっている長崎市浦上地区の上空で炸裂した。

を背負って防空壕へ避難していた。「防空壕へ着くと頭巾を外してしばらく休んでいました。そのうち空襲警報が解除になったので、男の子たちは外に飛び出して行きました。私は次兄(従兄弟)から『広島では空襲警報が解除されてから爆弾が落とされた。解除になっても壕から出てはいけない』と言われていたので、防空壕の中でじっとしていました。それでも外で遊びたいと思っていて